

## 『行政学』を執筆して

真 淵 勝

書齋の窓 2009. 9

今年の四月下旬、有斐閣から拙著『行政学』を出版させていただいた。それにあわせて『行政学』を執筆して」というタイトルで文章を書くようにと、依頼を受けた。しかしながら、まだ評価の固まっていない本について、執筆時の苦労話などを書くのはおこがましく、差し控えるべきだと思ふ。そこでいくつか思いついたことを、概ね時間軸にそって、書くことにしたい。

### 研究仲間にコメントをもらう

拙著の中間的な草稿は二〇〇八年夏にできた。そして、研究仲間に読んでいただいた。率直な感想を言わせていただければ、遠慮がないというか、情け容赦ないというか、実に手厳しいものであった。著者の苦労も知らないで、言いたい放題のコメントをくださったと今でも思っている。しかし、その内容はどれも具体的であり、説得的であり、生産的であった。誰もが、本

気で取り組んでくれたと思った。無視することなど考えられず、著者の能力と、時間の許す範囲で対応しなければならぬと思った。

このような研究仲間をもてたことを、心からありがたいと思う。自分以外の研究者の書きかけの本や論文に、意義のあるコメントをすることは、適切な表現が思いつかないが、「利敵行為」でもある。研究仲間といえども、ライバルであり、ライバルの仕事の質を高めることは、合理的選択論流にい

えば、合理性のない行動である。しかし、そうした偏狭な考えもなく、真剣に読んでくださり、実に有益なコメントをくださった。

私自身が、過去にどれほど知人たちの仕事に貢献できたかを振り返れば、恥ずかしく思えてくる。とくに若い研究者の方々は、抜き刷りなどを送ってくださるが、正直に告白すれば、生産的なコメントを添えて、対応したことは実に少ない。研究とは「社会的営為」であると偉そうなことを言うこともあるが、実践がともなっているわけではないのだ。

拙著を執筆する過程で、我が身を振り返り、大いに反省をした。そして、献本等に対するお礼の書式だけはさっそくつくった。現在のところ、実践したのは二回だけではあるが。

### ホテルで「缶詰」になる

拙著執筆の最終局面で、ホテルでの

た。拙著では、論文や書物から直接引用している部分が多い。また、法律の条文をかなり引用している。しかし、恥ずかしながら筆者にはブラインドタッチができないために、画面、キーボード、引用文献の三カ所を見つつ引用するために、どうしてもミスが多くなる。その結果、担当編集者には多大な負担をおかけすることになった。筆者が引用した元資料をすべてコピーされ、一個ずつ照合してくれたのである。横でときどき見ている、頭が下がる思いがした。

本を一冊書くと寿命を数年縮めると

「缶詰」というものを経験させていた。だく機会をもった。流行作家などが、缶詰にされた経験をおもしろおかしく書いているエッセイを読むことがあったので、ちょっと憧れの気分を持って、二泊三日の缶詰を敢行させていただいた。

しかし、結論から言えば、二度としたくないという気持ちである。もちろん部屋にはテレビもあり、ホテルにはバーもある。自宅にいるときよりは、誘惑の材料は少ないのだが、全くないわけではない。しかし、少なからぬ費用を出版社に負担してもらっている手前、真面目に仕事に取り組まなければならない。朝から部屋の机にしがみつき、原稿を書く。疲れたらベッドに倒れ、仮眠をとる。そしてまた起きては原稿を書き、疲れたらベッドに倒れ込む。この繰り返しであった。気分転換に話し相手になってくれる人もおら

いわれる。しかし、編集者もまた同様に、いやそれ以上に、寿命を縮められるのではないかと思った。端書きには謝辞を書かせていただいたが、改めて考えると、あれでは不十分だと思ひ、ここで再度お礼を申し上げなければならぬと思った。

### 懲りずに「2ちゃんねる」を読む

拙著でも少し触れたことであるが、インターネットの巨大サイト、「2ちゃんねる」をのぞき見してみることがある。拙著執筆後は、「政治学者総合スレッド」を見た。拙著に対する巷の

ず、食事も一人寂しく食べる。見張りはないので、自由に外出することはできるが、それでは心が痛む。仕方なく、机に向かう。

作業は幸いなことにはかどった。通常の倍のスピードで書けたように思う。しかし、味気ない三日間であった。憧れの気持ちは見事に消し飛んだ。よほど追い込まれない限り、するものではないと、心から思った（実は、その後も別の仕事ですることにはなったのだが）。

### 編集者と並んで仕事をする

論文や本を執筆していて、担当の編集者にいろいろとお世話になるのは毎回のことである。執筆時には、適宜、鞭をいれてもらい、校了時には校正などで手伝っていただく。

しかし、今回は、初めて編集者と同じ会議室で並んで校正作業をする機会をえて、その大変さを思い知らされ

評判を、気にしてのことである。

この種のサイトのテーマは移ろいがちで、どんどんと変わっていくが、五月中旬の現在、幸か不幸か、拙著が話題の中心になっている。内容は、一言でいえば、読まなければよかったという感想をもたせるものである。ある程度予想していたことだけに、最初は後悔した。しかし、だんだんと慣れてくると、神経も図太くなり、懲りもせずについつい見てしまう。

このような書き込みをしているのは、大学院修士課程の院生ではないかと推測している。博士課程の院生にし

ではコメントが幼稚であり、学部の学生にしては知ったかぶりであるというのが、このようにプロファイリングした理由である。そして、日本の修士課程大学院生はどれほどのフラストレーションを抱えているのだろうかと心配になった。

私の務めている京都大学の大学院生は「生意気」である。授業において、どんどん発言してくるし、教師に対しても臆することなく質問し、教師の説明に対してもしやりに疑問を呈して行く。「先生のおっしゃる通りでございます」という雰囲気はまったくありません。これがいいと考えている。自分の論文を完成させるために、それなりの苦労があり、ストレスもあるであろうが、教師に対してはそれほど鬱屈した気持ちもっていないのではないかと、希望的に観測している。それと比較すると、余計なお世話ではあると思いつつも、こうしたサイトに熱心に書き込ん

でいる諸君は、どうなっているのだろうかと心配になった。

#### 講義で拙著を使う

この四月に始まった講義の途中から、拙著を教科書に使っている。書いたばかりの教科書を使っての講義は大変である。教科書通りに話をするのであれば、講義の必要はない。教科書とまったく関係のない話をすれば、教科書の必要はない。教科書との距離をどのようにとるか、常に難しい問題である。しかも、書き上げたばかりの教科書を使う場合、それから少し離れた話をするのは大変である。学生に伝えたいことのかかりのことは、書いてしまっているからである。

そこで講義の前日には、何を追加して話すか、苦吟することになる。教科書に書けなかったような同業者の悪口を言おうものなら、あつという間に、どこかのサイトで晒されてしまいそう

な気がする。そこで真面目に、もう少し深めたほうがよいと思われるテーマについて調べる。調べ初めるとつい面白い面白くなり、霞ヶ関や自治体にあるこれ電話をして、わからないことを尋ねる。

こうした拙著に書けなかった重要なテーマについて、掘り下げて勉強し、整理し、蓄積していけば、いずれ拙著を全面改定するおりに、役に立つだろうと期待している。

ただし、これ以上分厚い教科書を出版していただけるかどうかは、別問題ではあるが。

(まぶち・まさる)

|| 京都大学大学院法学研究科・法学部教授

真淵 勝 [著]

『行政学』有斐閣刊

A5判、六三八頁、定価三七八〇円(税込)

● 好評発売中